

トラック 2-2

昔々、ゾラジンジという、とても大食いのジンがいた。彼はイヴェムベニの町に友人がいた。その友人は、ジンの友人が本当に大食いかどうかを試してみようとした。彼は、ゾラジンジを家に招待して言った。

「イヴェムベニの私のところに来たまえ」。

彼は友人の招待を受けた。友人は、町中に大食いの友人が来ることを知らせた。町の住人それぞれが、ゾラジンジを自分の家に招待することになり、彼に料理として甘いポテトを供する準備をした。ジンが友人の家に行き、長い間話し合った。しばらくして、町長がジンの友人の家に来て、客が既に着いたかどうかを尋ねた。町長は彼を家に招待し、彼らは準備された甘いポテトを食べた。彼はこうやって町中を回った。

友人の家を辞する時、ゾラジンジは言った。

「誰かが私のことを尋ねたら、いないといってくれ」。

その時、扉が叩かれ、訪問客がまだいるかどうか聞かれ、友人は肯定した。ゾラジンジは誰が自分に会いに来たかを尋ね、訪ねて来たのはハトゥブ(モスクの説教師)の息子だと言われた。ゾラジンジは言った。

「会いたいのが説教師なら嫌だとは言えない」。

ということで、彼は甘いポテトをもう一度食べた。次に族長の息子が現れ、彼は断ることが出来ず、また甘いポテトを食べた。

真夜中頃、彼は寝に帰ったが、猛烈な便意を催した。彼は家中を便だらけにしてしまった。彼は恥じ入って家を出て、バンダ・サムリニの町の入り口まで垂れ流し続けた。彼はボウンデとイツェンドラを分ける山によじ登った。山の頂上から、彼は喚いた。

「イヴェムベニの住人よ、甘いポテトのおいしい料理は、水みたいな粘り気がある」。

そして彼は立ち去った。